

日本ロマンス語学会第20回大会 自由討議

司会：さて、ロマンス語の代名詞と言いましても、人称代名詞から始まり、指示代名詞の問題、それから場合によっては所有形容詞と俗に言っているものも代名詞というテーマの中に入れることも可能でございますし、さらに関係代名詞、それから疑問代名詞と幅広くなって参ります。そこで時間も限られておりますので、最初にどなたか問題のある方はおっしゃって頂きたいと思いますが、その前にロマンス語の代名詞ということで、まず私の頭に即座に浮かんで参ります何か問題になりそうなものをひろって参りますと、先程下宮さんのご指摘がございましたもののひとつですけれども、人称代名詞を使用することが *obligatoire* である言語とない言語ということがロマンス語の中でも問題になります。それから例えば補語（目的語）として使われる代名詞、また前置詞を含む代名詞、それから3人称の再帰代名詞、それから先程の下宮先生の御指摘になった中では *Svi luppi neo-europei* というところの5番の *iste* に当たるところが今のロマンス語でどのように使われているか問題で、イタリア語 *codesto* の用法もそうです。それから午前中に発表がございました敬称の問題、それから中性代名詞という表現が妥当かどうかは別として、これをロマンス語でどういうふうに扱ってゆくか、またそれを標準語に限るのか、あるいは方言のレベルにまで下げるのかということですね。こういったところを一応考えているのですけれども最初に何か問題を提起なさりたい方はおっしゃって頂きたいと思います。

A：「人は一般に」という話が今ありました。前の時のシンポジウムで *se* の話が出まして、その時にスペイン語にも *hombre* にその用法があるという話があって途中で立ち消えになりました。あのとき *uno* の話も出ておりましたが……。そこで中世スペイン語では *hombre, diablo* 「男、畜生、悪魔」という意味ですが、これらの語に代名詞的用法があり、いずれも *él, yo* の用法があるのは想像されますが、特に面白いのは *hombre* の非人称受身用法であります。これはフランス語ではあたりまえのことですが、スペイン語では中世で消えてしまいました。ここでその例を挙げますと1260年のカスティール語の聖書の *San Marco 2-20* に “E no mete ninguno uino nuevo en odre [sic] uiedro [sic],” – *uiedro* というのは *viejo* 「古い」のことです。 – 「誰も古い袋に新しいブドウ酒を入れません。」 “ca si no, rompe el uino los odres e uiertes – *uiertes* は *se vierte* の意味 *el uino, e perecen los odres.*” 「もしそうしないならば、そのブドウ酒は袋をひき破って流れ出し、皮袋をダメにする。」この次の “Mas deue ombre meter – *ombre meter* は *metrese* の意味 – *uino nuevo en odres nuevos.*” 「人は新しいブドウ酒を新しい皮袋に入れなければならない。」に *ombre* の「一般に人は」あるいは受身の用法があります。この証明として1622年の聖書に “Mas el vino nuevo en odres nuevos sehá de echar – *sehá de echar* は *ha de echar-se* のこと” と *se* を使っていますし、現代聖書でも “El vino nuevo se echa...” と「入れられる」となっています。Vulgata（5世紀）では “sed vinum novum in utres novos debet mitti.” 「入れられなければならない」と受身になっていますし、ポルトガル語でも “O vinho novo deve ser deitado...” と、や

は「入れられなければならない。」、スペイン語の“ser ecjado”になっています。カタラン語でも“s’ha de posar”と、やはりseになっています。ついでにドイツ語の方も1534年のルーテル聖書を見ますと、“Sondern man sol most inn newe Schleuche fassen.”というようにスペイン語 hombre と同じように man を使っています。16世紀初めの Torres Naharro の劇“Serafina”の5幕385行のところユダヤ起源の諺がありまして、“que a vezes salta el remedio do menos hombre lo espera.”「人が期待していないところで良い対策が飛び出すものだ。」と言っていますが、実はこれは参考がありまして、おそらく Cejador の諺集を見ていると思います。“Se [sic; i.e. De] donde menos se piensa salta la liebre.”「ほとんど考えないところから兎が飛び出す。」の“Se piensa”を Torres Naharro は hombre としています。同じく Rodríguez Marín という人を見ますと、“A veces el remedio salta de donde el diablo no pensara.”「悪魔がめったに考えないようなところから良い解決が飛び出す。」の「悪魔」もseの用法であります。

司会：確かに大阪大の時にも大きな話題のひとつになった問題でございました。さて、次に発言を御希望される方……。

B：代名詞の変化というのは名詞とは非常に違った変化体系を持っていますが、例えば現代のスペインアではsを複数の代名詞に付けて名詞のように使っている例がかなり出てきているように聞いております。13世紀のアングロ・ノルマン語には、例えば「私の」というフランス語の ma maison というのを mas mesons とそのままの形でsを付けている。これは非常に早くなくなってしまっております。フランス語でもイタリア語でも代名詞の複数の表示は名詞の場合と違うのに、なぜ現代のスペインア語のような一定のものが出てきたのか。その影響などはどこから来ているのか。などと前から思っております。名詞の影響が代名詞に及ぶというようなことを説明しておられる方がおられましたなら御発言頂ければと存じます。

司会：今の問題に関しましてスペイン語、アングロ・ノルマン語以外の言語、イタリア語やフランス語でございませうでしょうか。古浦先生がいらっしゃいますけれどイタリア語で何かそういう例でぶつかられたことがございませうか。sが付いて所有形容詞と言いますか……。

司会：大高先生、スペイン語の例が聞きとれなかったので、もう一度おっしゃって頂ければと思います。

B：例えば mi hombre に対して mis hombres におけるように、mi に対して mis というのを思っているわけです。なぜsが複数のsに使われるのか。sというのは名詞の複数のしるしであって、代名詞変化は所有代名詞・形容詞、疑問・関係代名詞に見られますが、複数は、例えば je に対して nous, lui に対して leur のように、全く違う、名詞変化にはない複数の作り方があります。また ille はフランス語では il になっていますが、複数 illi を ils と書くのは後になってからです。

C：ラテン語 meus の複数で男性 meos, 女性 meas になりますが、それが起源と考えてはいけないうですか。

B：問題点はそうではなくて、フランス語ではsaの複数にsを付けたのではなく、母音まで変化させていますが、アングロ・ノルマン語では、単にsを付けて、類推によってなのか、mas, tas, sas というものにしてしまっているということです。これはどうも、英語がフランス語の影響でsを

複数の表示にしたから生じたんじゃないかと思いますが、その現象が一定の時期に全部消えてしまって無くなっている。またフランス語では *votre livre* の複数形は *vos livres* ですが、*vos* の *s* は *mas, tas, sas* の *S* ではなくて違うところから来ています。各ロマンス語の代名詞パラグラムを参照すれば史的発展が明らかです。

D：今御指摘された問題は、スペイン語では、例えば *mis* 「私の」（複数形）というのはラテン語の *meos* とつながりがあるんでしょうけれど、あまりにも形が祖形と離れておりまして、単なる音変化ではなくて、類推によるところが大きいんじゃないかと思うんです。指示形容詞の複数形のほとんどはこのように単数に *s* を付けて作ります。ただ例外として指示形容詞 *este* 「この」複数形が *estos* になるとかいうのがありますので、複数形はすべて単数に *s* を付けるというのではなくて、やはりラテン語の形が変化して、その代名詞の名残りが残っているものはスペイン語にもあるかと思えます。スペイン語をやっている我々は単数形に *s* をつけて複数形を作るのがあたりまえのように思っていましたけれども、フランス語の場合は単数からすぐ複数形を作れないという点などを考えますと、この語形に関しては、ロマンス語の中ではスペイン語がむしろ例外的なのかなと思った次第です。

E：発表の際にちょっと失念致しましてお聞きするのを忘れたのですが、スタンダールの『パルムの僧院』を読んでおりました時に「彼、〔バルボーネ書記〕は囚人を *voi* を呼んだが、これはイタリアで召使いを呼ぶとき使う言葉である。」（新潮文庫版（下）p 30）という一節がありました。これについて二、三のイタリア文学を専門にされている方にお聞きしたんですがよく判らないというご返事でしたので、この場を借りてイタリア語の御専門の先生にお聞きしたいんですが。

F：相手は一人なんですか。

E：文脈は主人公ファブリスに対して恨みを持っているバルボーネ書記というものが、*voi* と呼んだという一対一の場面でした。

司会：イタリア語では *tu* よりも *voi* の方が、何かすごみがきくと言いますか、これは「貴様」というような感じで *tu* では弱いようなんです。喧嘩を始めましても *tu* より *voi* の方が、すごみがきくという印象を個人的に持っていますが……。

G：中世フランスの12世紀のテキストを読んでおられますと同一人物が別の人物に向かって呼びかけるのに *tu* にあたる言葉と *vous* にあたる言葉が一行、二行、数行おきに交互に繰り返されるという大変奇妙な現象におつかります。交替して出てくるんですが説明が全くつかないんです。また私の知る限りそれについて説明をしている文法書に今だかつて出会ったことがないんです。こういう問題に関して色々なレベルで考えねばならないんだらうと思うんですが、果たして整合的な理論があるのかどうか疑問に思うこともあるんです。何か参考になることがあればお教え願いたいと思います。

司会：*tu* と *voi* とか、敬称の問題というのも社会言語学的レベルとか色々なことから何か問題になるような気が致します。

G：同じテキストで、同じ人物が別の同じ人物に対して語りかけている場合に、いわゆる親称にあたる *tu* と、いわゆる敬称 *vous* にあたる代名詞を混ぜて使っています。その間、何の心理的な場面の変化もないということなんです。どうしてそういうことが行なわれるかということなんです。

A：先程も〔山下先生の発表の時〕それらしいことを言ったんですけども、王様に *tú* と行って

いるのは神様扱い、主君にvosといているのは敬称で問題はないのですが、次の場合が問題です。ルネッサンス劇のセリフで、司教様になる候補者の侍たちがしゃべっている中でスキャンダラスな行状に関して言いあいを致します。あの時にも túとvosを混ぜて話しているわけです。vosと言っている時には「貴様」と同じで、形の上では相手を立てているながら、軽蔑するという裏の意味があると思います。もう中世の時は túとvosは随分と混乱しているように見えながら、両者をたくみに使い分ける面白さを見せています。もちろんvosは敬称ですが、一方で親近的で軽く見る裏意もあるのです。今でもvosが残っているサラマンカに行った時に同じ目に会いました。サラマンカ郊外農村出身の学生が私にvosと言ったり túと言ったりするんですが、vosと言っている時はどうも「貴様」と言っているようで、túと言っている時は友達の関係のようでした。はっきりしたものはないと思いますが。

A：この「貴様」は「貴い様」でございます。それでいて「お前」より下の含みがあるようです。

D：同じ問題ですが、先程の山下さんの発表の時に私の論文「ドンキホーテ（第一部）に於ける tú, vos 及び vuestra merced の tratamiento について」の引用がありました。私はそれをまとめるに当たって一応第一部の作品全部の二人称の表現を拾って整理したんですが、その時実際の作品に当たってみて、本当にこんなに混用があるのかと驚いたわけです。結論の部分は少し無理をして何とかまとめた形になっているのですが、実際個々の例に当たってみますと、同一人物のAからBに対してただ一種類の二人称だけが使われているのではなくて、大抵の場合、二種類の混用があるのがあたりまえのようです。ただ統計的に整理すれば、例えばドン・キホーテがサンチョパンサに対してはtúで呼びかけ、その逆の場合は vuestra merced で呼びかける場合が99%以上の確率でひとつの傾向として出ます。それでも一部にはこれと違った例が出て来ます。そこで今の御質問ですが、二人称の扱いが話し手の心理によって違って来るのではなくて、全く同じ気持ちで互いに会話を交わしながら、その tratamiento の混用が形の上だけで起きてしまうのではないかとさえ考えられる場合があります。私としても、この混用がなぜ起こるかについては未だに結論が出ていないんですけども、こんな混用があって、そして統計的に処理した結果、一応特定の二人の人物の間ではひとつの tratamiento の傾向が決まるだろうということで結論を出しているに過ぎません。本当のところは確かに疑問が残ります。今の御指摘の場合ですと、フランス語ではひとつのセンテンスの中で二種類の形が出るとか、あるいはひとつのパラグラフの中で二種類の形が出るとかということがありますが、『ドン・キホーテ』の場合はそれほどのバラツキはなかったように思います。一般的に言って、こういう二人称の扱いには常に混用の問題があるように思います。

司会：スペイン語では túとvosが政治的な国を単位として南米とスペイン本国でのずれといったようなことが当然であろうかと思えます。他の言語では、例えばイタリアは狭い国ですが、南イタリアでは、敬称はイタリア標準語のLeiではなく、vousにあたるvoiがまだ使われております。これは旅行をされればすぐお気付きになるかと思えます。イタリア国土全体の分布を見ますとやはり敬称としてはLeiとvoiが共存している形になっています。

この代名詞の問題は最初に申し上げましたように色々項目が沢山ありまして、話しているうちにテーマが次第に広がってくるような大きな問題だと思えます。一応、時間が参りましたので、この辺で打ち切らせて頂きます。